

人間における＜自然さ＞の探求
—「人—モノ」関係の理解を手懸りに—

穴見慎一（東京農工大学大学院）

動物学者の小原秀雄氏が提唱される「人間における＜自然さ＞」（自然的でありながら、社会的・文化的存在としての人間の「自然さ」）は、いわゆる野生動物とは異なる人間独自の「自然さ」であり、その発露は、社会という人為的構築物に具現化されていると思われる。しかるに、現代の社会は人間にとって「＜自然さ＞」か、と問われるならば、残念ながらそうではないと、答えざるをえないであろう。

その理由の一つは、現代の社会が環境問題を引き起こし、自然的存在である人間を脅かしている点において、それを「＜自然さ＞」であるとは、到底言えないからである。つまり、少なくとも環境問題を引き起こさないような社会こそが、「＜自然さ＞」が具現化された社会であると言えよう。

しかしながら、理由は、そうした人間存在の生物学的な側面に終始するものではない。現代の社会にみられる、人間の精神に関する種々の問題もまた、社会が「＜自然さ＞」を失っているといわざるをえない、もう一つの理由なのである。例えば現代の日本社会の特徴ともいえる「死に至るイジメ」や「過労死」、また「過食や拒食」そして「自殺者の増加」など、そのどれをとっても、「＜自然さ＞」な社会現象とは言い難いように思える。特に、自らの生存を脅かすかのごとき種々の現象は、個人の尊重を謳う現代の社会においては、不可解極まりないものであろう。少なくとも、その原因は、個人に全てを還元すべきものではなく、人間と人間との関係が織り成す、種々の社会的文脈の中にあるという仕方で理解することが重要であり、換言すればそれは、精神の問題の原因が現代の社会の人間関係を産み出すその構造にあるということであろう。

以上のような問題意識をもとに、本研究では、現代の社会から「＜自然さ＞」が失われた理由を「人—モノ」関係の変質に注目することで、解き明かして行きたい。そのポイントは二つある。一つ目は、「商品関係」の成立であり、もう一つは、「技術」の変質である。また、そうした議論を踏まえた上で、「人間における＜自然さ＞」の具体的な内実に迫り、その回復への手懸りを探してみたいと思う。